

エゴン・シーレとジストニア

高尾昌樹*

エゴン・シーレは28歳で生涯を閉じたオーストリアの画家である。彼の絵画の特徴から、彼自身がジストニアだったのではないかとされているようであるが、最近の研究、また彼の絵や肖像を見る限りそれらしい点はない。むしろ、医学的な題材をもとに絵を描いていた点が推察され、サルペトリエール病院の絵を参考にしたこともある可能性も指摘されている。

KEY WORDS エゴン・シーレ, ジストニア, オーストリア

はじめに

「エゴン・シーレとジストニア」というタイトルをいただいた。本号は「芸術家と神経学」という大きなテーマである。私が一番驚いたのは、この企画が編集委員会で話題に上がったときに、エゴン・シーレ (Egon Schiele; 1890-1918) という画家のことを、ほかの委員の先生方にご存知のようであったことである。もちろん、私はまったく知らなかった。そもそも、小さいときからおよそ美術というものに対する素養はなく、美術館なども最後に行ったのはいつであろうといったレベルである。

早速、「エゴン・シーレ」という名前を入れてWeb検索をしてみたが、出てきた絵を見ても、見たこともなかった。さらに、私はジストニアの専門科でもないの、これは大変なことになったと思った。しかし、シーレという方は、相当有名な方の方である。自宅近くの図書館で検索してみるとなんと28冊もヒットした。その中で、めぼしそうな本を借りてきた。また、PubMedに出ていた論文にも目を通した¹⁻¹⁰⁾。それらを参考に自分の想像をまとめただけであり、美術的な評価などは私にはできないし、シーレ自身の精神分析などもできないので、詳しい先生がおられましたらぜひご指摘ください。

1. エゴン・シーレの生涯

シーレは、1890年6月12日、ウィーン近郊のトゥルンの駅舎で生まれた。この地には、現在エゴン・シーレ美術館がある (<https://www.schielemuseum.at/en>)。そしてこの年は、ゴッホが死去した年でもある。父は、オーストリア・ハンガリーの国有鉄道で働いていたので、駅舎が住居も兼ねていた。シーレが12歳のとき、父親は進行麻痺で退職、15歳のときに亡くなった。シーレは父親との関係はよかったが、母親とは必ずしもよくなかったようである。そのため、父の死は大きな衝撃となったらしい。シーレ自身は11歳で理工系高等学校へ入学したが、学校の成績は芳しくなく、当初から絵を描くことを目指していた。彼の才能を見抜いた教師たちにも恵まれ、16歳でウィーン美術アカデミーに入学。ここがどんなに凄いとこか私にはわからないが、若いときから芸術の才能に恵まれていたことは間違いない。

ただ、芸術的才能とは別に、当時でも (いまなら受け入れは不可であろう) かなり受け入れがたい行動をしていたようである。特に、シーレがかわいがっていた妹のゲルティとの関係には母親が心配していたようであるし、22歳のときに、ノイレンバッハ (Neulengbach, ウィーンの西へ車で1時間ほどの地) で少女をモデルに絵を描いていたために、不道徳、未成年者誘拐で拘留されたこ

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院臨床検査部・総合内科 (〒187-8551 東京都小平市小川東町4-1-1)

*[連絡先] msktakaobrb@ncnp.go.jp



Fig. 1 《トリエステ港》(1907年)

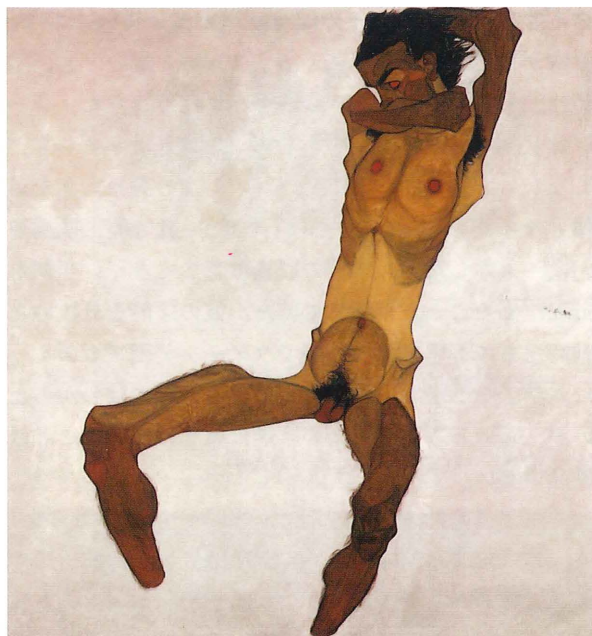


Fig. 3 《座る男の裸像》(1910年)

ともある⁷⁾。思いのほか重い罪にならなかったようであるが、判事自体もエロティック画像の収集家だったと言われており⁷⁾、当時のオーストリアの社会的な背景なども考慮しないと理解できない。

シーレの絵に対する考え方を解説する能力は私には



Fig. 2 《アルトゥール・レスラーの肖像》(1910年)
レスラーはシーレの絵を多数収集した。結果的には経済的に支えたことになる。

ないので、これ以上は深入りはしないようにする。拘留を解かれウィーンに戻った後、イタリアのトリエステへ旅をして船の絵を描いている (Fig. 1)。シーレの絵として出てくるものと、まったく異なる印象である (捻れていない)。再びウィーンへ戻り、1918年に生涯を閉じるまでの6年間、同じ場所に居を構えた。1915年には、4年間連れ添った愛人兼モデルと別れ、エディット・ハルムスと結婚する。4日後にはオーストリア軍に入隊。その後も、創作活動を継続するが、1918年に妊娠中の妻がスペイン風邪により死亡、その3日後にはシーレ自身も同疾患により28歳で死亡した。

II. エゴン・シーレとジストニア

いただいたタイトルはシーレがジストニアかどうか、あるいはシーレがジストニアに興味を持っていたかどうかの両者にもとれる。明確な回答はないものの、あえて言うとするれば、前者はノー、後者はイエスかもしれないとしておく。前者に関しては、シーレの絵、特に肖像画 (自画像) の中で、体幹が捻れた絵や頭部が回旋した絵が多いからだと思う (Fig. 2~4)。このことに関する詳細な総説もあるが¹⁾、そこでもシーレ自身はジストニアではないという結論である。そう言ってしまうと、この総説も終わりになってしまいが、なぜこういった絵を描いたのであろうか。まず、画家としての駆け出しの頃に、グスタフ・クリムト (Gustav Klimt; 1862-1918) の影響を受けたことは大きいようだ。

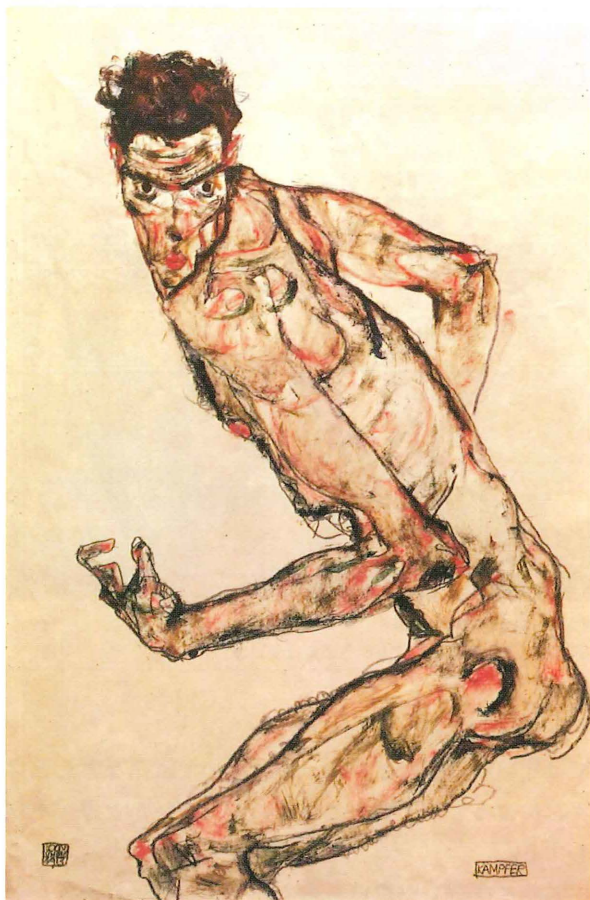


Fig. 4 《戦う男》 (1913年)

そう言えば、クリムトの「接吻」という絵も、頭部が回旋している (Fig. 5)。でもそれだけではあるまい。

いくつかのシーレに関する本を読んでも、シーレ自身は医学との接点があったようだ。例えば、友人の産婦人科医であるエルヴィン・フォン・グラフの配慮で、妊婦や新生児のデッサンをしていたらしい (Fig. 6)⁷⁾。さらに、当時サルペトリエール病院から出されていたヒステリーなどの患者写真からも影響を受けたことが推察されている^{1,5)}。サルペトリエール病院に実際出向いたのかどうかはわからないが、そんなこともあったかもしれない。シーレの多くの肖像画は、確かに頭部が横を向いているものも多いが、それは他人であろうが自画像であろうが、同じように身体を捻らせている。シーレ自身の写真を見ても、確かに頭部を回旋させているもの、傾けているものもあるが、どちらかと言えばおどけているようだし、普通の向きの写真もあって、頸部のジストニアのように一定の向きではないし、わざと傾けている印象である (Fig. 7)。また、普通の向きの写真も多い。

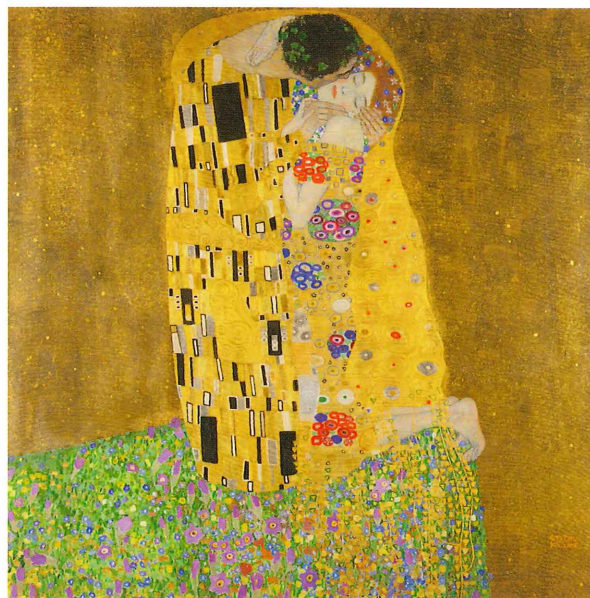


Fig. 5 グスタフ・クリムト《接吻》 (1907~1908年)
エゴン・シーレに多大な影響を与えたと考えられる画家。



Fig. 6 《新生児》 (1910年)
知人の産婦人科医から見せてもらっていた新生児をもとに描かれたと考えられる。



Fig. 7 エゴン・シーレの肖像写真 — 1914~1918 年頃
おどけたような写真が多いが、妻との写真は、ごく普通の写真である。ジストニアという印象は受けない。

おわりに

シーレはジストニアではなかったという、期待外れのまとめになってしまった。シーレに関する解説書などを読んでみる限りでは、もちろん情熱的かつ一般人から見れば変わった人ということになるのかもしれない。しかし一方、金銭的にも苦労していた様子がうかがわれる手紙も多い⁴⁾。晩年は絵自体の値段はかなり高くなっていったようだが、浪費癖もあってお金が足りなかったようである。それであれば、収集家の目にとまるより売れるような絵を描こうとしていたこともあるかもしれない。シーレの絵には、確かに頭部や体幹を不気味に捻らせ、平面的な印象の絵が多いが、奇抜

ではない風景画などもあって、極めて緻密な考えとプランによって絵を描いていたのではないかと思ったりもする。

本論に掲載した絵は数多くの中からは、私が選んだものである。絵にお詳しい方から見れば代表的なものではないかもしれない点はご容赦いただきたい。いま、新型コロナウイルス感染症のパンデミック下であり、シーレもスペイン風邪で命を落とすことになったことを思えば、感染症のパンデミックの恐怖をあらためて思う。スペイン風邪がなく、長生きをしていれば、どんな画家になっていたのだろうか。シーレの絵が、シャツや鞆のデザインになっていたりしたのだろうか。かと俗っぽいことも思ったところでこの論を終えたい。

文献

- 1) Erbguth FJ: Egon Schiele and dystonia. *Front Neurol Neurosci* **27**: 46-60, 2010
- 2) Martin C: Scrutinised bodies: Egon Schiele and psychiatry. *Lancet Psychiatry* **1**: 508, 2014
[doi: 10.1016/S2215-0366(14)00099-6]
- 3) ヴォルフガング・ゲオルグ・フィッシャー: SCHIELE シーレ. タッシェン・ジャパン, 東京, 2005
- 4) 大久保寛二 (編訳): エーゴン・シーレ — 日記と手紙. 白水社, 東京, 2004
- 5) ジャン＝ルイ・ガイユマン (著), 千足伸行 (監修), 遠藤ゆかり (訳): エゴン・シーレ — 傷を負ったナルシス. 創元社, 大阪, 2010
- 6) フランク・ウィットフォード (著), 八重樫春樹 (訳): エゴン・シーレ. 講談社, 東京, 1984
- 7) 黒井千次: 永遠なる子供エゴン・シーレ, 新装版. 河出書房新社, 東京, 1997
- 8) 坂崎乙郎: エゴン・シーレ — 二重の自画像. 平凡社, 東京, 1998
- 9) 水沢 勉: エゴン・シーレ — ウイーン世紀末を駆け抜けた鬼才. 六耀社, 東京, 1999
- 10) クリスティアン・M・ネベハイ (著), 水沢 勉 (訳): エゴン・シーレ — スケッチから作品へ. リブポート, 東京, 1993

Title

Egon Schiele and Dystonia

Author

Masaki Takao

Department of Clinical Laboratory and General Internal Medicine, National Center of Neurology and Psychiatry (NCNP) National Center Hospital, 4-1-1 Ogawahigashicho, Kodaira, Tokyo 187-8551, Japan

Abstract

Egon Schiele was one of the famous expressionist painters and ended his short life at the age 28 years. Based on the characteristics of his paintings, it was considered that he might have had cervical dystonia. However, the hypothesis may be wrong. The interesting things are that he might have strongly influenced by medical materials including neuropsychiatric patients seen in Salpêtrière hospital.

Key words: Egon Schiele; dystonia; Austria

脳神経外科学のスタンダード、堂々の改訂。

標準脳神経外科学

監修 新井 一

編集 富永悌二・齊藤延人・三國信啓

第15版

標準
脳神経外科学

監修
新井 一
編集
富永悌二・齊藤延人・三國信啓

脳神経外科学の基本を
わかりやすく伝える 第15版

複雑な脳の構造・機能から最新の検査・治療までを系統立てて解説
脳神経外科を学ぶたいすべての人におくる、本邦唯一の定書

医学書院

構造的にも機能的にも複雑で奥深い、脳神経外科学領域の決定版テキスト。今版でも医学生に必要なトピックを精選・強化。重要事項がひと目で分かるアンダーラインと縦横無尽のクロスリファレンスで、“基本をわかりやすく伝える”ことを徹底した。フルカラーのシェーマが美しい、堂々の第15版!

●B5 頁460 2021年 定価7,700円(本体7,000円+税10%) [ISBN978-4-260-04318-2]



医学書院

〒113-8719 東京都文京区本郷1-28-23 [WEBサイト] <https://www.igaku-shoin.co.jp>
[販売・PR部] TEL:03-3817-5650 FAX:03-3815-7804 E-mail:sd@igaku-shoin.co.jp